

第六章 結論

6.1 コソアの拡張について

この研究は、コソアの意味拡張の観点から、従来の指示詞を考察し、指示機能が曖昧なコソアへの連続性と拡張タイプを分析することが目的であった。

検討の結果、指示機能を持つコソアから指示機能が曖昧なコソアへと意味が変化していくだけではなく、指示機能を持つコソア（指示詞と呼ばれるコソア）にも、次のような「時間」から「空間」への拡張が見られることがわかった。

- (1) コ系語：現場→現在
- ソ系語：非現場→非現在；非遠方→非過去
- ア系語：遠方→過去

日野(2001)は日本語の名詞や動詞の文法化過程における意味変化として「抽象化」「抽出化」「意味の希薄化」の三つのタイプを取り上げている。

本稿ではこの三つのタイプの意味変化は名詞と動詞だけではなく、コソアの意味拡張の説明にも応用できると考えた。

まず、現場指示から文脈指示、観念指示への拡張は、具体的な意味から抽象的な意味へと変化する過程を指す故、指示対象の質が変わるが、意味の喪失はない。指示機能を持つコソアの意味変化（第三章を参照）は主に「抽象化」であると言えよう。

コソアの拡張のもう一つタイプは、「それで」「それに」「そうして」などのような「コソアを含む接続詞」が考えられる。指示機能が接続機能へ変化する過程は文脈指示の照応機能を介して成り立つ。「指示機能→照応機能（指示・代用）→接続機能」の順で、結果的に、指示機能が完全に接続機能に変わっている。形態的变化と音形的変化を伴う形式、典型的な文法化の一例である。

また、指示機能から感動詞への拡張は「抽出化」による文法化であると考えられる。

コソアを含む感動詞は現場指示から物事が存在する空間（話し手の縄張りか聞き手の縄張りか）を抽出するのに対し、コソアを含むフィラーは文脈指示から物事が存在する時間（短期記憶か長期記憶か）を抽出する故、両者は同じ「抽出化」過程と考えられはしても、区別される必要がある。

- (2) ①指示機能を持つコソア：抽象化による意味拡張（空間→時間）
- ②指示詞から接続詞へ：意味の希薄化による意味拡張（ $A > A + B > B$ ）
- ③指示詞から感動詞へ：抽出化による意味拡張（ $A (a_1, a_2 \dots) > a_1$ ）

具体的に、以下のように「コ」「ソ」「ア」を分けて、論じた。

6.1.1 コ系語の意味拡張

①現場指示から文脈指示へー現場から現在への抽象化（メタファー）ー

現場指示のコの中心的功能は、「話し手に近い物事を指示する」ことである。

文章における文脈指示の場合、コ系語は単なる照応機能だけではなく、先行文脈が話し手の勢力範囲にあることを積極的にマークすることで、スポットライトを当てるように、先行詞を目立たせる機能をも含んでいる。

また、談話の場合、コ系語を用いると、まるで現場に存在するようにありありと指示することができるという機能を持っている（久野 1973）。つまり、話し手の空間の縄張り（現場）から時間の縄張り（現在）へ意味拡張していると考えられる。下の図では、Lmは「話し手の縄張り」であり、現場指示の場合は話し手に近い現場を指し、文脈指示の場合、話し手に近い時間（＝現在）を指す。

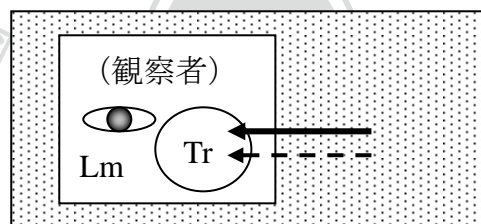


図1：指示機能を含むコ系語のイメージ・スキーマ

②指示詞から感動詞へー話し手の縄張りに入る方向性を抽出するー

感動詞の「これ」は「聞き手の注目を話し手の縄張りに引き込む」機能を有している。つまり「話し手の縄張りに入る」という方向性が抽出される。話し手の縄張り内に引っ張られることによって、結果的に聞き手が話し手が言いたいことに気付き、話し手が「これ」の後、「呼びかけ」、「命令」や「叱責」など、聞き手に強く意志伝達ができるわけである。

感動詞の「この」は話し手が近い時間（現場認知）を抽出する故、言い淀んだ時に現場で検索することを意味する。

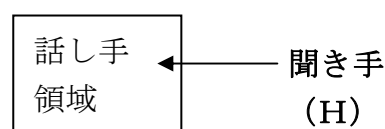


図2：指示機能が曖昧なコ系語のイメージ・スキーマ

6.1.2 ソ系語の意味拡張

①現場指示から文脈指示へー非現場から非現在への抽象化（メタファー）ー

文脈指示におけるソ系語は「談話文脈指示」と「文章文脈指示」の二つの機能を持つ。現場指示のソは「話し手の縄張り以外にある物事」を指すので、談話文脈の場合は、ソは「聞き手が提出する文脈を再び提示する」か「新規導入」として「話し手が提出する先行文脈を再び指示する」時に使われる。

そして、文章文脈指示では、先行文脈と後続文脈が何らかの関連性を持たない場合は、ソが使われない。ソ系語が担う照応詞は、先行文脈と同定しにくい故、それを同定するのに、臨時に意味を加えなければならない。どちらかとうと現場指示の「話し手の縄張り以外の物事」からの拡張と考えられる。下の図のように、Lmは「話し手の縄張り」であり、現場指示の場合は現場を指し、文脈指示の場合は、現在を指している。それに対して、Lm以外の領域はまず「非現場」と「非現在」であると考えられる。また、ア系語が担う「遠方」や「過去」でもないため、「非遠方」と「非過去」のような曖昧な領域をも指していると言える。

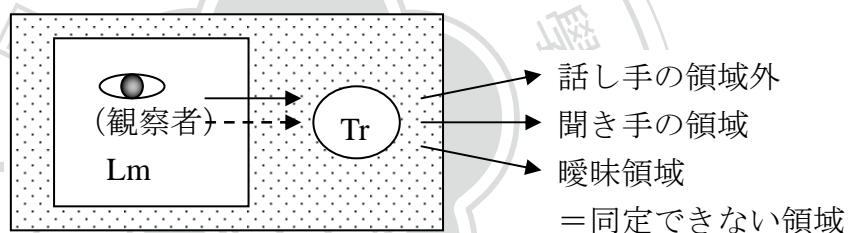


図3：指示機能を含むソ系語のイメージ・スキーマ

②指示詞から接続詞へー意味の希薄化ー

指示詞を含む接続詞は、指示詞から拡張されたものと考えられる。「それ＋X」という接続詞の意味拡張は、指示詞から文法化したものであると言えよう。

(3) 指示詞を含む接続詞の文法化過程

A	→	A+B	→	B
指示詞		指示機能＋接続機能		接続詞

[機能的変化]

指示	→	(指示＋接続機能)		=非典型的接続詞
代用	→	(代用＋接続機能)	→	接続機能 =典型的接続詞

[形態的变化]

それ（指示詞）→（それ＋助詞・接続助詞）→「それ＋X」
 それ（指示詞）→ それ（指示詞）＋から（助詞）→ それから（接続詞）

③指示詞から感動詞へ—話し手領域から出る方向性を抽出する—

「それ」は「これ」と正反対に、「話し手の縄張りから出る」という方向性が抽出される。「それ」が担う機能は「聞き手に動作発動を促す機能」と「話し手が自分の動作発動を促す機能」とに大まかに分類することができる。

「その」は話し手に近くない時間（短期記憶）を抽出する故、言い淀んだ時に前後文脈で検索するのが基本的である。

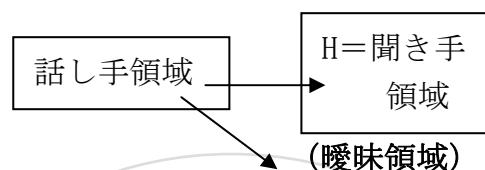


図4：指示機能が曖昧なソ系語のイメージ・スキーマ

6.1.3 ア系語の意味拡張

①現場指示から文脈指示へ—遠方から過去経験への抽象化—

現場指示のアの指示機能は、「話し手の遠方にある物事を指し示す」ことである。談話文脈の場合、アが使われる最低の条件として、「話し手の過去経験」でなければならない。話し手に遠い空間から話し手に遠い時間へと意味が変わっている。

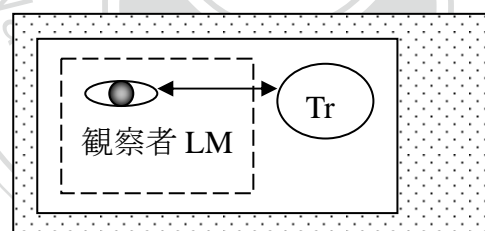


図5：指示機能を含むア系語のイメージ・スキーマ

②指示詞から感動詞へ—遠く離れている方向性を抽出する—

「あれ」は「話し手の過去経験と矛盾する感嘆や驚き」を表す。そのため話し手から遠く離れている方向性を抽出するのである。

「あの」は話し手にとって遠く離れている時間（長期記憶）を抽出する故、言い淀んだ時に過去の経験を検索するために発せられる。

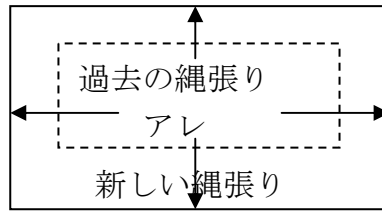


図 6：指示機能が曖昧なア系語のイメージ・スキーマ

6.1.4 意味拡張の一方向性

指示機能を持つコソアから指示機能が曖昧なコソアへの意味拡張は、「空間→時間→観念→様態・程度→文の接続機能→感動」という表現プロセスが考えられる。これは、Traugott (1989) で提示されたモデル「叙述的 (propositional) → テキスト的 (textual) → 表現的 (expressive)」という抽象化の順序とほぼ一致すると言えよう。拡張していくに従って、話し手の意図や心的態度を表すことができるようになる。

表 1：コの拡張

	現場指示	文章文脈	談話文脈指示	感動詞
	(＋指示物)			(－指示物)
融合	S (Hを含むこともある)に近い	実質的 顕著的 ズレのある直示	S (Hを含むこともある)にとって時間的近 (現在)	フィラー (この)
対立	Sに近い物事	視点遊離 解説的	Sが存在する時間 (現在)	Hの注意を引く (これ)

表 2：ソの拡張

	現場指示	文章文脈	談話文脈	接続詞	感動詞
	(＋指示物)			(－指示物)	
融合	S領域外 (曖昧領域)	先行詞は前後文脈に現れる同定でない物事	先行詞はS自身の先行発話にを指し示す	指示機能－ 接続機能＋	他の領域に力を及ぼす (それ) フィラー (その)
対立	H領域内		Hが提出する文脈をSが再び指す		Hの領域に力を及ぼす (それ)

表 3：アの拡張

	現場指示	談話文脈		観念指示	感動詞への拡張
	+指示物			-指示物	
融合	Sに遠い	Sの過去体験		Sの観念内にあるもの	感動、意外、驚愕 (あれ)
対立	SとHにも遠い			SとHの過去共通体験	SとHの観念内にあるもの

空間

➡

時間

➡

対人関係

➡

抽象化

➡

話者の心的態度

➡

6.1.5 コソアの階層性

コソアの一連の語彙においては、空間の指示から時間へ、具体的なものを指す用法から抽象的な用法へと意味が拡張されいくプロセスが見られる。

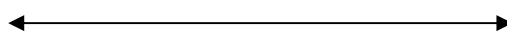
- (3) 現場指示：[+空間 +時間]＝現場・現在
- 文脈指示：[-空間 +時間]＝非現場・現在や近未来
- 観念指示：[-空間 -時間]＝非現場・過去

指示機能を持つコソアを「内容語」¹、そうでないコソアを「機能語」として、その間にはっきりした線を引くことはできないが、以下のようにまとめることができる。

表 4：コソアの階層性

内容語 (指示代名詞)			機能語		
空間	時間 (現在)	回想 (過去)	様態・程度	対人関係	感動詞
+空間	-空間	-空間			
+時間	+時間	-時間			
現場指示	文脈指示	観念指示	指示形容詞	応答詞	掛け声
①文章文脈指示			指示副詞	相づち	フィラー
		① 談話文脈指示	接続詞		

指示機能を持つ
基本義
命題



指示機能を持たない
意味の漂白化・文法化
モダリティ (話者の心的態度)

¹ 『はじめての日本語教育 基本用語事典』によると、機能語とは文型を構成する要素、つまり文中に並んだ語同士の関係を表し、文の構造の骨格となる語のことである。内容語とは、事物を指し示す実質的な内容を表す語である。ここでは、内容語以外の要素を機能語として見ることにする。

6.2 今後の研究課題

6.2.1 接続詞、感動詞以外のコソアの意味拡張

本稿は感動詞と接続詞が指示詞と連続関係を形成する過程を考察したが、「レ」系（これ、それ、あれ）と「ノ」系（この、その、あの）以外のもの（eg. こう、そう、ああ）には今回はほとんど触れなかった。

指示詞を含む複合語は他にも、慣用表現「それは」「これは」（三上 1955、正保 1981、八木 2006）、あいづち・応答「そう」（定延 2002、柏崎 1995）、対定型句「あっちこっち、そうこうするうちに、どいつもこいつもなど」（吉田 2005）などがある。

接続詞をはじめ、あいづち、応答などの指示複合語も「ソ」系語が多く見られる。場合によっては、ソ系語しか派生できない例もある。たとえば、定延（2002）は感動詞の「そう」を、肯定応答の「そう」、疑念の「そお〜?」、了解の「そう」、気付きの「そう」、フィラーの「そう」に下位分類している。

柏崎（1995）も、「そう」を字義通りの意味（応答詞）と字義通りではない意味（あいづちとフィラー）に分けている。

- (4) ラオ「きれいな 公園ですね。」
ハン「そうですね。」（『新日本語の基礎』第 13 課：柏崎 1995）
- (5) 加藤「日本語の 勉強は どうですか」
アリ「そうですね。難しいですが、おもしろいです」（『新日本語の基礎』第 8 課；柏崎 1995：228）

また、「そう」には、例（7）のようにフィラーとしても使われる。

- (7) 来週の、そう（ねえ）、火曜にきてもらいましょうか。（定延 2002：92）

それぞれ、指示機能を持つソ系語とどう関係しているかについて、今後の課題として取り組んでいきたい。

6.2.2 第五章の不備なところ―「この／その／あの」の使い分け

本稿では言い淀みの「あの」と呼びかけの「あの」を区別したが、呼びかけの「あの」は言い淀みの「この」と「その」に置き換えられないことが分かる。

本稿はコソア型フィラーと指示詞の繋がりを中心とした故、言い淀みの「この」「その」「あの」の区別について詳しく論じていないのは事実である。コソア型フィラーの使い分けは、使われる談話の場以外、他にどのような要素に支配され得るかは、まだ詳しく検討されていない。ここでは、コソア型フィラーは話し手が言い淀んだ時に適切な発話を検索する場が違うという仮説に基づき分類を行ったが、それをサポートするのに、なお、談話コーパスで用例を集め、分析する必要があるであろう。

以上のことを、今後の課題としたい。